

蝦名 大助 (d-ebina@kuins.ac.jp)

要旨

カムサ語は南米コロンビアで話される先住民語である。カムサ語では、動詞において主語や目的語の数（単数・双数・複数）が標示される。その手段として人称接頭辞、数の接尾辞、語幹交替がある。人称接頭辞は、主語・目的語の人称・数を標示する。数の接尾辞は名詞に付くものと同じであり、動詞に付いた場合には主語の数を標示する。数の接尾辞による数の標示は随意的である。最後に、いくつかの動詞では、主語または目的語の数に応じた語幹交替がある。人称接頭辞や数の接尾辞とは異なり、語幹交替では単数と複数（2以上）のみが区別される。語幹交替の有無は、それぞれの動詞語彙ごとに決まっているが、主語よりも目的語の数に応じた交替のほうが多い。

1. はじめに

カムサ語は南米コロンビア南部で話される系統不明の先住民語である。カムサ語では、動詞において主語や目的語の数（単数・双数・複数）が標示される。その手段として人称接頭辞、数の接尾辞、語幹交替の3つがある。本発表では、数の標示という観点からこれら3つの手段の違いと関係性について述べる。

以下に、発表者の分析によるカムサ語の動詞構造を示す。

COMP	INT/NEG	PSN	FUT	AFF	ASP	IMPF	RET	TRANS	PAST	REFL	STEM	NUM
<i>t-</i>	<i>ke-</i>		<i>cha-</i>	<i>n-</i>	<i>j-</i>	<i>ts-</i>	<i>t-</i>	<i>is-</i>	<i>an-</i>	<i>en-</i>		<i>-at</i> (DU) <i>-ang</i> (PL)
HS				NEG	DUR							
<i>i-</i>				<i>at-</i>	<i>d-</i>							

図 1. カムサ語の動詞構造

図中各行の上段は各形態素の意味（グロス）を、下段は各形態素の代表的な音形を示している。人称接頭辞（PSN）と語幹（STEM）については該当する形態素が複数個存在するため、具体的な音形は示していない。数に関係する形態素は接尾辞であり、それ以外の接辞はすべて接頭辞である。

* 本論文のもととなる調査は、2017年～2019年の8月～9月、および2020年2月～3月にシブンドイ（Sibundoy）で行なった。これらの調査は文部科学省科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））「カムサ語の動詞構造の研究」（課題番号：17K18498）の支援を受けた。調査協力者は San Felix 地区（vereda）出身の60代女性である。調査協力者に感謝したい。

音素は以下のとおり：i, e, a, o, u, ə, p[p~ɸ], t, k, b, d, g, ts, ch[tʃ], tʃ[tʃ~tɕ], s, sh[ʃ], ʃ[ʃ~ɕ], j[x], ʒ[ʒ], m, n, ñ[ñ], l, r, w, y. なお ll[k] はスペイン語からの借用語のみに現れる。

2. 人称接頭辞による数の標示

定動詞において人称接頭辞は義務的に現れる。人称接頭辞は主語と目的語の人称と数を表わす。以下に自動詞と他動詞の人称接頭辞のパラダイムを示す。

表 1. 主語人称接頭辞（自動詞）

人称と数	形式
1SG	<i>sə-</i>
1EXCL.DU	<i>sbo-</i>
1EXCL.PL	<i>sbo-</i>
1INCL.DU	<i>bo-</i>
1INCL.PL	<i>mo-</i>
2SG	<i>ko-</i>
2DU	<i>ʂo-</i>
2PL	<i>ʂmo-</i>
3SG	<i>e-</i>
3DU	<i>bo-</i>
3PL	<i>mo-</i>

表 2. 人称接頭辞（他動詞）

目的語 主語	1SG	1EXCL.DU 1EXCL.PL	1INCL.DU 1INCL.PL	2SG/2DU 2PL	3SG	3DU/3PL
1SG				<i>kobo-</i>	<i>sə-</i>	<i>sə-</i>
1EXCL.DU				<i>kobo-</i>	<i>sbo-</i>	<i>sbo-</i>
1EXCL.PL				<i>kobo-</i>	<i>sbo-</i>	<i>sbo-</i>
1INCL.DU					<i>bo-</i>	<i>bo-</i>
1INCL.PL					<i>mo-</i>	<i>mo-</i>
2SG	<i>ʂko-</i>	<i>ʂko-</i>			<i>ko-</i>	<i>ko-</i>
2DU	<i>ʂmo-</i>	<i>ʂmo-</i>			<i>ʂmo-</i>	<i>ʂmo-</i>
2PL	<i>ʂmo-</i>	<i>ʂmo-</i>			<i>ʂmo-</i>	<i>ʂmo-</i>
3SG	<i>ʂo-</i>	<i>ʂo-</i>	<i>bo-</i>	<i>komo-</i>	<i>bo-</i>	<i>e-/(bo-)</i>
3DU	<i>ʂo-/ʂmo-</i>	<i>ʂo-</i>	<i>bo-</i>	<i>komo-</i>	<i>bo-</i>	<i>e-/(bo-)</i>
3PL	<i>ʂo-/ʂmo-</i>	<i>ʂo-</i>	<i>bo-</i>	<i>komo-</i>	<i>mo-</i>	<i>e-/(mo-)</i>

Jamioy Muchavisoy (1999) では主語人称接頭辞と目的語人称接頭辞が独立したものとして分析されているが、蝦名 (2020) では、これらを共時的には融合したものとみるべきことを示した。以下に例を示す。

(1)	cha	tbontsejanchetá	átʂbe	kat.ʂát ¹
	cha	t-bo-n-tsejancheta	atʂ-be	kat.ʂat
	3SG	COMP-3SG/DU>3SG-AFF-殴る	1SG-GEN	兄 (弟)

「彼 (女) は私の兄 (弟) を殴った。」

(1)で人称接頭辞 *bo-* は、主語が 3 人称単数または双数であり目的語が 3 人称単数であることを標示している²。

(1)や表 1 および表 2 からわかるように、人称接頭辞は主語と目的語の人称を標示するのに一定の機能を果たしているといえるが、特に他動詞活用においては数の区別にさほど役立っていない。たとえば、*go-* は主語が 3 人称で目的語が 1 人称 (除外形) であることを標示するが、主語についても目的語についてもその数はわからない。

(1)では目的語 *átʂbe kat.ʂát* 「私の兄 (弟)」は有生 (animate) である。目的語が無生物の場合、その人称や数は人称接頭辞によって標示されない。

(2)	cha	tonjínʒ	bəts	yébən
	cha	t-e-n-j-inʒ	bəts	yebən
	3SG	COMP-3SG-AFF-ASP-見る.PERF	大きい	家

「彼 (女) は大きな家を見た。」

すなわち、目的語が無生物の場合、人称接頭辞による活用は自動詞型である。

主語が 1/2 人称で目的語が 3 人称の場合、人称接頭辞は自動詞の場合とほぼ同じである。2 人称双数主語の場合を除き、人称接頭辞は主語の人称と数だけを標示していて自動詞型であると考えたいが、果たしてそう分析してよいか、わからない。

3. 接尾辞による数の標示

カムサ語では、ほとんどの接尾辞はホストが動詞か名詞かが決まっている。例外的に数の接尾辞は名詞にも動詞にも付くことができる。動詞に付くと主語の数を表す。Jamioy Muchavisoy (1999) には動詞に付く数接尾辞の記述があるが、Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973) では名詞に付く場合のみ記述があり、動詞については記述がない。

数の接尾辞による数の標示は随意的で (optional) ある。数の標示は余剰的 (redundant) であることもあるが、表 1 から明らかのように、特に他動詞活用においては数による形式の区別がないことも多い。数の接尾辞には主語の数を明示する機能があると考えられる。カムサ語では主語名詞句や目的語名詞句は節において必須の要素ではない。

また、命令接頭辞は主語の数による区別がない。このような場合にも数の接尾辞によって主語 (ここでは命令の相手) の数を明示的に示すことができる。

¹ アクセントについてはわからないことが多いが、語の中で強勢が置かれていると思われる音節にアクセント記号を付して示すことにする。

² 3>3DU/PL では *e-* が優勢であるが、時折揺れがみられる。

- (3) minʒəŋg
 m-inʒ-əŋg
 IMP-見る.PERF-PL
 「(お前たち) 見ろ！」

(3)で *-əŋg* は主語が複数であることを標示している。これは随意的である。たとえば *minʒ* 「見ろ！」といった場合、主語が単数なのか双数なのか複数なのかは *minʒ* という動詞形からは明らかでない。

また、1人称除外形において数の区別がなくなっている方言がある（世代差の可能性もある）。このような場合も、数の接尾辞を付加することによって主語の数を明示的に示すことができる。

- | | | | |
|-----|-------------------------------|------|-------|
| (4) | sənjɪŋəŋg | bəts | yébən |
| | ø-sə-n-j-inʒ-əŋg | bəts | yebən |
| | COMP-1EXCL-AFF-ASP-見る.PERF-PL | 大きい | 家 |
- 「私たちは大きな家を見た。」

Jamioy Muchavisoy (1999) では数の区別のみならず除外形・包括形の区別も示されておらず、1人称主語の接頭辞として *sə-* のみが挙げられている。そして、*-at* (DU) (Jamioy Muchavisoy では *-t*) や *-əŋg* (PL) (Jamioy Muchavisoy では *-ng*) によって数が示されるとされている (Jamioy Muchavisoy 1999: 259)。

1人称除外形で数の区別がある方言では(4)は非文となるはずである。発表者のコンサルタントの方言では(4)は非文である。

4. 語幹交替による数の標示

動詞の中には、主語が単数か複数か、あるいは目的語が単数か複数かによって異なる語幹をとるものがある。本発表ではこの現象を「数による語幹交替」と呼ぶ。語幹交替³の有無は語彙的に決まっている。数による語幹交替を持つ語彙のうち、それが主語の数に関わるものはもっぱら自動詞であるようだ。他動詞の場合、語幹交替は目的語の数に関して起こる。

上で述べたように、人称接頭辞や接尾辞においては単数・双数・複数の区別があるが、語幹交替においては単数語幹と複数語幹の区別しかない。よって、本発表で複数語幹における「複数」とは「2以上」という意味で用いることにする。たとえば、動詞「見る」には、完結相の語幹に2つある。*-inʒ* は目的語が単数の場合に、*-anʒ* は目的語が複数 (2以上) の場合に用いられる。

- | | | | | |
|-----|-----|-----------------------------|------|-------|
| (5) | atʂ | sənjɪŋ | kanʒ | intʂá |
| | atʂ | ø-sə-n-j-inʒ | kanʒ | intʂá |
| | 1SG | COMP-1SG-AFF-ASP-見る.PERF.SG | 1 | 人 |
- 「私は一人の人を見た。」

³ 語幹交替には数によるもの以外にアスペクトによるものがある。Jamioy Muchavisoy (1999) は数による語幹交替を認めていないが、発表者が語幹交替と呼ぶものをすべて「語根+接辞」のように分けて分析している。一方、後述するように、Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 78) は、発表者のいうところの「数による語幹交替」あるいはそれに類するものを、接辞付加、または母音交替として分析している。

(6)	atɕ	sənjanɔ	intɕáng
	atɕ	ø-sə-n-j- anɔ	intɕa-əng
	1SG	COMP-1SG-AFF-ASP-見る.PERF.PL	人-PL
	「私は人々を見た。」		

目的語に対する有生性の制約はここでも有効である。目的語が複数であっても有生でない場合、単数語幹が用いられる。

(7)	atɕ	sənjinɔ	yebənáng
	atɕ	ø-sə-n-j- inɔ	yebən-əng
	1SG	COMP-1SG-AFF-ASP-見る.PERF.SG	家-PL
	「私は家々を見た。」		

すなわち複数語幹に対して単数語幹が無標 (unmarked) であるということになる。

人称接頭辞による数の標示と語幹交替とは一貫していなければならない。たとえば、動詞「座る」は有生物しか主語としてとれないが、主語の単複に応じて *-otəbem/-otəbiam* という2つの完結語幹を持つ。この場合、(主語) 複数語幹と単数主語を表す人称接頭辞の組み合わせはありえず、反対に (主語) 単数語幹と複数 (2以上) 主語を表す人称接頭辞の組み合わせもありえない、ということになる。

(8)	a.	tontotəbém
		t-e-n-t-otəbem
		COMP-3SG-AFF-RET-座る.PERF.SG
		「彼 (女) は座った。」
	b.	tmontotəbiám
		t-mo-n-t-otəbiam
		COMP-3PL-AFF-RET-座る.PERF.PL
		「彼らは座った。」

すなわち、この種の動詞では語幹によって人称標示が「欠如型」(defective) でありえる。*-otəbem* は単数語幹であるため、複数主語を標示する人称接頭辞とは共起しない。反対に *-otəbiam* は複数語幹であるため、単数主語を標示する人称接頭辞とは共起しない。

主語名詞句や目的語名詞句は節において必須の要素ではないし、また、人称接頭辞によって主語や目的語の数がそれぞれ単数なのか双数または複数なのか表わし分けられないことも多いから、語幹交替による数の標示は必ずしも余剰的ではない。たとえば(6)で、目的語 *intɕáng* 「人々」は落とすこともできるが、その場合にも複数語幹であることから目的語が有生でかつ複数 (2以上) であることがわかる。一方(8a)(8b)では主語の数が人称接頭辞によって標示されているから、語幹交替は余剰的である。

これまでの調査で、数による語幹交替があることが分かっている動詞語彙は、以下のとおりである。

自動詞：「歩く」「入る」「落ちる」「座る」「忘れる」

他動詞：「嗅ぐ」「待つ」「出会う」「言う」「話す、知らせる」「見る」「見せる」「(非譲渡物を) 所有する」「愛する」「見知っている」「呼ぶ」「助ける」「追う」「殺す」「連れる」「置く」「命じる」「疲れさせる」「育てる」「抱く」

全体的にさほど多くは見つかっていないが、他動詞のほうが多い。自動詞は移動を表すものが多い。自動詞の場合主語が有生であるものが、他動詞の場合目的語が有生であるものが多いが、必ずしもそうであるわけではない。一つ注目されるのは、「話す、知らせる」-*akwenta/akonta* (完結語幹) のペアである。明らかにスペイン語 *contar* 「話す、語る」からの借用である。数による語幹交替はそれほど生産的であるとは思われないのに、借用語であるにもかかわらず語幹交替がある。

6. まとめと今後の課題

a) カムサ語では数に単数・双数・複数の区別がある。人称接頭辞は主語と目的語の人称と数を標示する。ただし、他動詞活用においては数が区別されないことが多い。

b) 数の接尾辞がある。双数接尾辞と複数接尾辞がある。名詞に付くものと同じであるが、動詞に付いた場合、主語の数を表す。一見すると数の接尾辞による主語の数の標示は余剰的であるように思われるが、上記のとおり他動詞活用では数が区別されないことがあること、命令接頭辞は数による区別がないこと、方言（世代差）によっては自動詞活用でも数の区別が失われていることがあることから、数の接尾辞による数の標示は一定の機能を果たしているといえる。

c) 語幹交替は単数か複数（2つ以上）かに応じてなされ、双数と複数の区別はない。語幹交替があるかどうかは動詞語彙によって個別に決まっている。主語に応じた語幹交替がある動詞と、目的語に応じた語幹交替がある動詞とがある。後者のほうが多く見つかっている。

先行研究では、Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 78) に動詞語幹における数の標示についての記述がある。ただし、行為の参与者の複数性についての記述は1件のみ（「入る」）であり、その他は行為の複数性についての記述である（「蹴る」に対する「何度も蹴る」、など）。行為の複数性を表す語幹交替についてはサンプルが少なく、まだ詳しいことが分かっていない。発表者はこれまで、数による語幹交替を、同一動詞語彙素 (lexeme) の異なる語幹とみてきたが、Juajibioy Chindoy and Wheeler のように、参与者の複数性も行為の複数性も等しく扱うのであれば、同一語彙素とみていいかどうか、検討が必要になると思われる。同一語彙素の語幹交替ではなく、数を表わす部分を別形態素と分析できればよいが、そのように分析できる見通しはたっていない。

d) 動詞において、目的語として人称や数が標示されるかどうかには有生性が関わっている。目的語が無生物の場合、人称接頭辞によってその人称や数が標示されることはない。同様に数による語幹交替は起こらず、もっぱら単数語幹が用いられる。

このことは目的語をどのように認めるか、という問題にかかわるが、本発表ではこの問題には立ち入らなかった。

略号一覧

>: 左項が主語、右項が目的語

1: 1 人称

2: 2 人称

3: 3 人称

AFF: 確言 (affirmative)

ASP: アスペクト (aspect)

COMP: 完成相 (completive)

DU: 双数 (dual)

DUR: 継続相 (durative)

EXCL: 除外形 (exclusive)

FUT: 未来 (future)

HS: 伝聞 (hearsay)

IMP: 命令 (imperative)

IMPF: 未完結相 (imperfective)

INCL: 包括形 (inclusive)

INT: 疑問 (interrogative)

NEG: 否定辞 (negator)

NUM: 数 (number)

PAST: 過去

PERF: 完結相 (perfective)

PL: 複数 (plural)

PSN: 人称 (person)

REFL: 再帰 (reflexive)

RET: 元の位置に戻る (returnative)

SG: 単数 (singular)

SIV: 語幹頭母音 (stem-initial vowel)

STEM: 語幹 (stem)

TRANS: 移動 (translocative)

参考文献

蝦名大助 (2020) 「カムサ語動詞形態論試論」 東京大学言語学論集42号. pp.11-40.

Jamiy Muchavisoy, José Narciso (1999) La lengua kamëntsa: estructuras predicativas. *Lenguas Aborígenes de Colombia*, Memorias 6: 231-284. Bogotá: Universidad de los Andes - CCELA.

Juajibioy Chindoy, Alberto and Alvaro Wheeler (1973) *Bosquejo etnolingüístico del grupo kamsá de Sibundoy, Putumayo, Colombia*. Bogotá: Instituto Lingüístico de Verano.